



ソーントン・ワイルダーの短編小説「軍艦」

——繰り返されるモチーフの変奏——

井 上 治

概要 ソーントン・ワイルダーの短編小説のなかで最も遅くに出版された「軍艦」では、ワイルダーの戯曲で繰り返し用いられている「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というモチーフが使われている。その意味でこの短編小説はほかのワイルダーの作品と関連している重要な作品であるのだが、そのモチーフがこの作品においてのみ少し形を変えて用いられている。その「変奏」がなぜこの短編小説のみに起こっているのかということ、この作品の執筆時期を推察することを通して明らかにする。

キーワード ソーントン・ワイルダー, 「軍艦」, 短編小説, モチーフ

原稿受理日 2015年9月30日

Abstract In “The Warship,” which was published last of all the short stories Thornton Wilder wrote, the motif, “the aspirations of the young [and not only of the young] for a fuller, freer participation in life,” is used. This motif recurs in many of Wilder’s plays. “The Warship” is very important because it is related to other works of his by the common motif. However, a variation of the motif is used in this short story. The reason why the variation is adopted only in this story is clarified by trying to identify when the story began to be written and was completed.

Key words Thornton Wilder, “The Warship”, short story, motif

1. はじめに

ソーントン・ワイルダー (Thornton Wilder, 1897-1975) は、多幕劇『わが町』 (*Our Town*, 1938) と多幕劇『危機一髪』 (*The Skin of Our Teeth*, 1942) に対してピューリッツァー賞 (Pulitzer Prize) を二度受賞している劇作家であるが、それよりも先に、中編小説『サン・ルイス・レイ橋』 (*The Bridge of San Luis Rey*, 1927) に対して同賞を与えられている。しかし、『わが町』がポピュラーな作品でありすぎるがために、『サン・ルイス・レイ橋』以外にも六篇の中・長編小説 (そのなかの『第八の日に』 [*The Eighth Day*, 1967] は、全米図書賞 [National Book Award] を受賞している) を書いていることはあまり知られていないし、ましてや、短編小説を書いていたことは、その短編小説の多くがワイルダーが大学在学中に学内のジャーナルに投稿したものであるということもあり、ほとんど知られていない。

ワイルダーの短編小説を時系列で整理すると、最初の短編は「封ろう」 (“Sealing Wax”) というタイトルで1916年4月に発行の『オーバーリン・リテラリー・マガジン』 (*Oberlin Literary Magazine*) に掲載された (ちなみに、その5か月前の1915年12月発行の同誌に「聖フランシスコの湖」 [“St. Francis Lake”], 1916年1月発行の同誌に「フラミンゴ・レッド」 [“Flamingo Red”] という二篇の一幕劇が先に掲載されており、その後は、同誌に少なくとも三篇の一幕劇が掲載された)。続いて、同年11月発行の同誌に「ドマ・イ・ヴェヌジアスの二つの奇蹟」 (“Two Miracles of Doma y Venuzias”) が、1917年6月発行の同誌に「ザベットの結婚」 (“The Marriage of Zabet”) が掲載された。次に、ワイルダーがイエール大学に転学したあとは、英文科の学部生のすぐれた作品に与えられる賞を受けた「強固な幽霊」 (“*Spiritus Vale!*”) が1918年5月に発行の『イエール・カレント』 (*Yale Courant*) に、「エディ・グレイター」 (“Eddy Greater”) が1920年6月発行の『イエール・リテラリー・マガジン』 (*Yale Literary Magazine*) (同誌に掲載された劇作品には一幕劇が少なくとも八篇と、初の多幕劇『トランペットを吹き鳴らせ』 [*The Trumpet Shall Sound*] がある) に掲載された。1920年6月にイエール大学を卒業したあとは、イエール大学出身者たちが立ちあげた *S4N* というジャーナルの1924年2月発行分に「ある日誌：最初で最後の記帳」 (“A Diary: First and Last Entry”) が (同誌には二篇の一幕劇が掲載されている)、そしてかなりあいだが空いて、1936年2月発行の『イエール・リテラリー・マガジン』に、本論で取り上げる、ワイルダーの最後の短編小説である「軍艦」 (“The Warship”) が掲載さ

れた。

これらの短編小説に関しては、ワイルダーの生誕110年に当たる2007年から2011年にかけてライブラリー・オブ・アメリカ (The Library of America) から刊行された、ワイルダーの三冊の戯曲・小説集の一冊『ソーントン・ワイルダー 「サン・ルイス・レイ橋」 その他の小説 1926年～1948年』(*Thornton Wilder: The Bridge of San Luis Rey and Other Novels 1926-1948*) のなかに、「封ろう」と「ドマ・イ・ヴェヌジアスの二つの奇蹟」という最初の二作品を除き、未発表の「むだな用心」(*“Précautions Inutiles”*) を加えた六篇の短編小説が収録された。

この刊行によって、ワイルダーの短編小説が多くの人目に触れることとなったが、このライブラリー・オブ・アメリカ版の刊行以前には、「ザベットの結婚」と「軍艦」だけがほかの書籍に再録されていた。「ザベットの結婚」は、1975年にリチャード・ゴールドストーン (Richard H. Goldstone) が出版した評伝『ソーントン・ワイルダー 親密な肖像』(*Thornton Wilder: An Intimate Portrait*) の本文中でその全文が掲載されている (Goldstone 23-25)。しかし、ワイルダーは、ゴールドストーンに宛てた1968年11月19日付の書簡で、“I can’t help feeling that you so far misunderstand me that you think I’m flattered when you run up palliatory [sic] extenuating phrases about The Trumpet Shall Sound or The Marriage of Zabett (I can’t remember a word of it — not even ‘the yellow lakes’). I suspect that every self-respecting author loathes hearing his juvenilia mentioned. Stop it.” (Wilder and Bryer 662-63) と、ゴールドストーンが評伝で行おうとしていた、彼の作家デビュー以前の作品を紹介するということに対して激しい怒りをあらわにしていることから、評伝へのこの小説の再録をワイルダーが喜んで認めたわけではないことは明らかである。

いっぽう、「軍艦」は、1961年に出版された『ピューリッツァー賞受賞者選集』(*Pulitzer Prize Reader*) に収録されているが、その版權のページに、“Reprinted from THE YALE LITERARY MAGAZINE with *special* permission of the author.” (Hamalian and Edmond 4, italics mine) とあることから、ワイルダーが転載をきちんと認めていることがわかる。さらに、ワイルダーは、1949年8月15日付の書簡で、自分の作品のドイツ語版の翻訳者であるハーバース・ハーリトシュカ (Herberth Herlitschka) に、“I enclose another letter about that plaguéd Warship Story. It’s a miracle that they dug it up out of an old edition of the ‘Yale Literary Magazine’.” (Wilder and Bryer 472) と書いていることから、ハーリトシュカがすでに「軍艦」を読んでいることが推察できる。

ゴールドストーンへの書簡にタイトルが出てきたワイルダーの初の多幕劇『トランペットを吹き鳴らせ』が、1919年から1920年にかけて『イェール・リテラリー・マガジン』に掲載された以降は書籍の形では出版されず、ライブラリー・オブ・アメリカ版にも収載されなかった、すなわち、自分自身が納得できていない作品を書籍として出版したくないワイルダーが、『サン・ルイス・レイ橋』から『第八の日に』までの五篇の中・長編小説の翻訳者であるハーリトシュカに「軍艦」をすでに読んでもらっているということは、ワイルダーがこの作品を多くの人の目に触れられたくない駄作であるとは考えていないことがわかる。

また、ライブラリー・オブ・アメリカ版に収載された未発表の短編小説「むだな用心」の執筆時期が1922年から1923年にかけてであることから、「軍艦」を除くすべての短編小説が、ワイルダーが中編小説『カバラ』(*The Cabala*, 1926)で小説家としてデビューをする前に書かれたものであることになる。さらに、「軍艦」が発表された1936年の前年の1935年とは、1月に中編小説『めざすは天国』(*Heaven's My Destination*)を発表し、半年間のヨーロッパ滞在を経て帰国した際に「小説を捨てて戯曲のみを書く」ことを宣言したワイルダーが、1938年の『わが町』、そして、のちに多幕劇『結婚仲介人』(*The Matchmaker*, 1955)となる『ヨンカーズの商人』(*The Merchant of Yonkers*, 1938)での劇作家としてのデビューに向かって多幕劇の創作を開始した年なのである (McClatchy 702)。

以上のように、ワイルダーの生前に書籍への転載が認められているという点で、また、ひとつ前の短編小説の発表から長いブランクがあったのちの作品であり、戯曲の創作へと気持ちが向かっている時期の作品であるという点で、「軍艦」はほかの短編小説とは違った特別な立場にある作品だといえる。

本論では、ワイルダーのすべての短編小説のなかで最も遅くに出版され、ほかの短編小説とくらべると創作時期などの点で異なった立場にある「軍艦」に関して論考を進める。まず、この小説で使用されているモチーフが、ワイルダーの戯曲で繰り返し用いられているものであることを例示し、この短編小説が他のワイルダーの作品と関連している重要な作品であることを明らかにする。次に、そのモチーフがこの作品では少し形を変えて用いられていることを指摘し、その「変奏」がなぜこの短編小説のみに起こっているのかという理由を、この作品の執筆時期を推察することを通して考察してみたい。

2. 繰り返されるモチーフ

「軍艦」は、わずか六つの段落で構成されているとても短い小説であるが、最初の二段落と残りの四段落という二部構成のようになっている。前半では、18世紀初頭にロンドンからオーストラリアへ受刑者とその家族を乗せて向かった船が難破して消息不明とされるが、百名ほどがオーストラリアの島へ漂着し、そこをイングラン (Ingran) と名付け、教会・学校などを建てて定住する。そして、食事の偏りによる病気と水平線にときおり見える島に向かった舟の事故により人口が減少する、フィンランド人の船員が漂着するが数年後に亡くなってしまふという、ある時期までに住民たちが島から脱出する意欲を失っていった経緯が示される。後半では、イングランに漂着したところに時間が巻き戻され、まず、聖書や賛美歌からの一節・冠婚葬祭の方法・ロンドンの地図など彼らが覚えていることが紙の代用品に書き留められて学校で用いられた、音楽家・詩人・数学者が現れたという、学問や文化の発達と深化が述べられる。次に、病気の流行のあとに人口の減少が続いたのは、島に閉じ込められているという精神的な影響が原因であり、それによって、飲酒による墮落や派閥間のいさかいが続いたことが述べられる。このように住民たちが島から脱出する意欲を失っていたころ、イングランの長のジョン・ウィーバー (John Weever) とその長男ロジャ (Roja) が島民にやる気を取り戻させる活動を精力的に行い、島は活気を取り戻していく。しかし、この親子のあいだにはその考えに大きな違いがあった。ジョンは島外の世界の話を “myth, tradition and hearsay” (“The Warship” 640) と捉えていたが、ロジャは, “Report said that hundreds, even thousands, of human beings lived there in dwellings of extraordinary size and beauty. Roja dreamed of finding a way to such a world, or of the possibility of such a world’s coming to Ingran.” (“The Warship” 640) と考え、外の世界とのつながりを望んでいた。そして、ロジャが長になったときに、巨大な遭難信号を苦勞して山の上に造り直すのだが、嵐で壊れてがっかりしてしまう。そのようなときに軍艦が現れて……というのが話の筋である。

まず、これまでの批評についてである。この短編小説は1936年2月発行の『イェール・リテラリー・マガジン』の百周年記念号に掲載されたが、これまでのワイルダー研究の批評書ではこの作品については、1967年に出版されたドナルド・ヘイバーマン (Donald Haberman) の『ソーントン・ワイルダーの戯曲：批評研究』(*The Plays of Thornton Wilder: A Critical Study*) でしか扱われていない。しかも、その批評書においても、“The action

of the play [= “The Happy Journey to Trenton and Camden”] is described in a line from one of Wilder’s Three Minute Plays, *The Warship*: ‘The best thing for us to do . . . is not to beat our heads . . . but to do our duty where we be.’” (Haberman 104) と、1931年初演のワイルダー的一幕劇「トレントンとカムデンへの楽しき旅路」について論を展開するために小説の一部が引用されているだけで、この短編小説についての筋の紹介もなければ、直接的な批評もない。ここでは、外の世界とのつながりを望む息子ロジャに対して、自分たちのいる場所で自分たちのすべきことをするしかないと諭す父ジョンの台詞が取り上げられ、その台詞が、その一幕劇の主題のひとつである「神の前ではすべてを受け入れなければならない人間の無力で小さな存在」を表す台詞、“God thought best, dear. God thought best. We don’t understand why. We just go on, honey, doin’ our business.” (“The Happy Journey to Trenton and Camden” 101) に関連していることを示唆している。この指摘は間違っていないのであるが、残念なことに、ヘイバーマンはこの「短編小説」を、ワイルダーの初的一幕劇集『池を波立たせた天使』(*The Angel That Troubled the Waters and Other Plays*, 1928) に収載されている短い一幕劇のことを指す「三分間劇」と紹介している。ワイルダーの研究者ならば起こり得ないはずのこのまちがいは、裏を返せば、それだけこの短編小説が批評の対象になっておらず、非常に軽い扱いを受けている証拠であるといえる。

ワイルダーのほかの七篇の短編小説は、これまでのワイルダーの批評書では研究の対象にはまったくなっていない。さらに、最新の論文集である『ソーントン・ワイルダー 新しい視点』(*Thornton Wilder: New Perspectives*) では、ライブラリー・オブ・アメリカ版に六篇の短編小説を収載した編者である J. D. マクラチー (J. D. McClatchy) も寄稿して、小説家としてのワイルダーについて論じているが、中・長編小説について触れているだけで、残念ながら短編小説に関するコメントはなされていない。このような批評の現状が、「軍艦」を含めたすべての短編小説は、初期の習作に過ぎず、重要なものではないという判断がなされてきたことをはっきりと示している。

また、これまでにワイルダーの評伝が四冊出版されているが、そこでの「軍艦」の扱いも批評書のそれと同様である。四冊の評伝のなかでは、1975年出版のリチャード・ゴールドストーンによる評伝のみでしか紹介されておらず、しかも、“After 1924, he published only a single short story, which he contributed gratis to a commemorative issue of the *Yale Literary Magazine*.” (Goldstone 71) というように、『イェール・リテラリー・マガジン』の記念号に掲載されたという情報まで付けているのに、「軍艦」というタイト

ルさえ紹介されていないのである。未発表だった「むだな用心」を除くほかの六篇の短編小説については、「ザベットの結婚」は四冊の評伝すべてにおいて紹介されているが、「封ろう」が二冊で紹介されている以外は、いずれか一冊の評伝においてしか紹介されていない。さらに、紹介されていても、「ザベットの結婚」以外については、半分以上はタイトルと発表年月という書誌情報しか載せられていない。以上のように、評伝においてもそのタイトルさえ紹介されていない作品がほとんどであるという現状が、ワイルダーの短編小説が初期の習作に過ぎないという評価を改めて強調するものとなっている。

これまでの批評を振り返ってみると、ワイルダーの短編小説に対する評価は低いが、これはきちんとした評価を受けていないだけである。例えば、「ザベットの結婚」は、ワイルダーの劇作品で繰り返して用いられている、特に代表作である多幕劇『わが町』において作者の主題と思想を表現する重要な場面で用いられているモチーフである「聖人」(saint)というキータームがすでに姿を見せているという点で、のちのワイルダーの作品につながる重要な作品なのである(井上「ザベットの結婚」8-13)。そして、この「軍艦」も、彼の劇作品で繰り返し使われている、特に多幕劇『結婚仲介人』において作者の主題と思想を表現する重要な場面で用いられているモチーフである「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」(“the aspirations of the young [and not only of the young] for a fuller, freer participation in life”) (Preface xiii) の原型が姿を見せているという点で、「ザベットの結婚」と同様にのちのワイルダーの作品につながる重要な短編小説なのである。

この節の冒頭でこの小説の話の筋を示した際に原文から引用した場面において、その「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というモチーフの原型がみられる。父ジョンは外の世界を「言い伝え」のレベルのものとしてしか捉えることができないういぼうで、息子ロジャはその世界へ行く道を見つけること、そして、その世界が自分たちの島へやって来る可能性も夢見ている。“The best thing for us to do, my son, is not to beat our heads about them [= the things about the outside world], but to do our duty where we be.” (“The Warship” 640) と述べて、現状で満足しようとするジョンは「人生に十分に参加しようとする熱望をもっていない人間」であるといえるし、“He stirred up the men of Lunnon to renew the huge distress signal on the peak. It was long and tedious work, but for a time the islanders were filled with an unaccustomed excitement.” (“The Warship” 640) というように、それが長く退屈な作業だとしても、新しい世界とのつながりを求めて具体的な行動を起こすロジャは「人

生に十分に参加したいという熱望をもっている人間」であるといえる。このように、「軍艦」では、多幕劇『結婚仲介人』で用いられている「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というモチーフの原型がはっきりと見受けられる。

さて、ここからは、「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というこのモチーフがワイルダーの戯曲においてどのように用いられてきたのかを時系列でまとめ直してみる。

実は、このモチーフが初めて使われたのは、「軍艦」においてではなく、ワイルダーがイェール大学在学中である1917年11月発行の『イェール・リテラリー・マガジン』に掲載された、のちに『池を波立たせた天使』に収載される短い一幕劇「メッセージとジャンヌ」(“The Message and Jehanne”)においてであった。この劇は、パリの金細工師チャールズ(Charles)が作った二つの指輪が間違っただけで配達されてしまい、そのうちの一人の女性が指輪に刻まれた言葉をきっかけとして、愛のない結婚を止めて愛する人の下へ向かうという作品である。配達を終えたトゥーリオ(Tullio)の話から、ジャンヌの家は金銭的に苦しく、さらに、彼女の婚約者であるドイツ人の伯爵は、彼女が愛する男はイタリアで学ぶイギリス人の学生であることを知っており、それに関して神経をとがらせていることがわかる。つまり、生活に困窮している親が彼女の意向を無視して金持ちの伯爵との結婚を決めたようなのである。そのジャンヌがチャールズの店を訪れ、もう一人の女性に渡されるはずであった指輪に刻まれた言葉、“‘As the hermit his twilight, the countryman his holiday, the worshiper his peace, so do I love thee.’”(“The Message and Jehanne” 71)によって真実の愛に目覚め、イタリアにいる恋人の下へ向かうことを述べる。親が決めた結婚に従おうとしていたジャンヌは、「軍艦」の父ジョンのように現在の境遇に甘んじている、すなわち、「人生に十分に参加しようとする熱望をもっていない人間」であった。しかし、愛する人との結婚を一度は諦めたが、指輪に刻まれた言葉をきっかけに、愛のない結婚をすることは止めて、愛する人の下へ向かう決意をしたジャンヌは、「軍艦」の息子ロジャのように現状に満足せずに具体的に行動を起こす、「人生に十分に参加したいという熱望をもっている人間」へと変化を遂げたわけなのである。

次にこのモチーフが登場するのは、「メッセージとジャンヌ」の5か月後の1918年4月発行の『イェール・リテラリー・マガジン』に掲載された、これものちに『池を波立たせた天使』に収載される短い一幕劇「ファニー・オトコット」(“Fanny Otcott” ジャーナル掲載時は“‘That Other Fanny Otcott’”)においてである。この劇は、隠居して過去の思い出に浸って暮らす女優オトコットが昔の最初の恋人の訪問を受け、聖職者になった彼

の「あなたとの恋愛を会衆に懺悔する許しがほしい」という言葉をきっかけに、もう一度人生を生きようと決意する作品である。会いに来る男性たちを追い返す日々を送っていたオトコットであったが、最初の恋人アッチソン (Atcheson) が訪ねてきたことで当時のことを思い出し、二人の恋愛が美しかったことを語る。ところが、アッチソンはその過去の恋愛が自分を苦しめているものに過ぎないことを、“[I]t has always remained as a bitter . . . as a distressing spot in my conscience.” (“Fanny Otcott” 37, ellipsis by Wilder) と告白する。自分が生きてきた過去を否定するアッチソンに対してオトコットは、“You have borrowed your ideas from those who have never begun to live and who dare not.” (Otcott 38) と、彼の考えは「人生を生き始めたことがない人、人生を生きる勇気のない人」のそれであることを告げる。そして、彼が帰るとオトコットは男性たちに会うことにし、“I shall be young again.” (Otcott 40) と、もう一度人生を生きる決意の台詞を口にしてこの劇は終わる。「人生を生き始めたことがない人、人生を生きる勇気のない人」とオトコットに言われたアッチソンはもちろんのこと、女優を引退後、男性たちにも会わずに自分の殻に閉じこもり、過去のプログラムや写真を見る生活を送ってそれなりに満足していたオトコットは、「人生に十分に参加しようとする熱望をもっていない人間」であったが、アッチソンの訪問をきっかけに、もう一度人生を生きる決意をするオトコットは、ジャンヌと同様に「人生に十分に参加したいという熱望をもっている人間」へと変わるのである。

そして、「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というモチーフは、その18年後の1936年の短編小説「軍艦」で用いられ、さらに、その19年後の1955年の多幕劇『結婚仲介人』の第四幕終幕、劇全体の終幕近くでふたたび姿を見せる。

ワイルダーは、『結婚仲介人』を再録した『劇三篇』 (*Three Plays: Our Town, The Skin of Our Teeth, The Matchmaker*, 1957) の序文で、“My play is about the aspirations of the young (and not only of the young) for a fuller, freer participation in life.” (Preface xiii) と述べて、「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」がこの多幕劇のモチーフであることを明らかにしているのであるが、この作品にはそのような熱望をもった人物が数多く登場する。ホレイス・ヴァンダーゲルダール (Horace Vandergelder) の店で働きつめのコーネリアス・ハックル (Cornelius Hackl) とバーナビー・タッカー (Barnaby Tucker) は店主の留守中にニューヨークへ出かけて羽を伸ばそうとすることで、稼ぎがないという理由でヴァンダーゲルダールの姪アーメンガード (Ermengarde) との結婚が認められないアンブローズ・ケンパー (Ambrose Kemper)

は駆け落ちを実行することで、帽子店の経営に飽き飽きしているアイリーン・モロイ夫人 (Mrs. Irene Molloy) はヴァンダーゲルダールと結婚しようとするので、そして、ヴァンダーゲルダールさえも、“After many years’ caution and hard work, I have a right to a little risk and adventure, and I’m thinking of getting married. Yes, like all you other fools, I’m willing to risk a little security for a certain amount of adventure.” (*The Matchmaker* 271) と語り、結婚をしようとするので、「人生に十分に参加したいという熱望」を示す。

しかし、「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というこの劇のモチーフを観客に明確に伝えているのは、第四幕終幕近くでドリー・リーヴァイ夫人 (Mrs. Dolly Levi) が観客に向かって語る、ヴァンダーゲルダールと再婚する決意を述べる次の台詞である。

And one night, after two years of this, an oak leaf fell out of my Bible. I had placed it there on the day my husband asked me to marry him; a perfectly gold oak leaf — but without color and without life. And suddenly I realized that for a long time I had not shed one tear; nor had I been filled with the wonderful hope that something or other would turn out well. I saw that I was like that oak leaf, and on that night I decided to rejoin the human race.

(*The Matchmaker* 395-96)

夫の死後、自分の殻に閉じこもり、自分では満足した生活を送っているつもりだったある晩、聖書に挟まれていた樅の木の葉が落ちてきたことをきっかけに、すなわち、自分が色あせて干からびたその木の葉のように過ごしていることに気づいて、もう一度人生を生きる決意をするのである。このように、『結婚仲介人』においては、「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というモチーフが、この劇のタイトルが示す人物であるリーヴァイ夫人からその終幕近くで観客に向かって直接語りかけられる台詞のなかで表現されることによって、作者の主題と思想を観客にうまく伝えることに成功しているといえる。

さらに、このモチーフの使用は『結婚仲介人』では終わらず、彼の生誕100年にあたる1997年に出版された『ソーントン・ワイルダール一幕劇集 第一集』(*The Collected Short Plays of Thornton Wilder Volume I*) のなかに、『結婚仲介人』の6年後の1961年11月に

ワイルダーが新聞のインタビューで公表し、1962年1月からその上演がスタートしたが未完のままに終わったプロジェクトの未発表作品が収載されたが、そのなかの二つの作品においてこのモチーフが再び用いられている。このプロジェクトは、それぞれが七本的一幕劇で構成される二つのサイクル劇「人間の七つの世代」(*The Seven Ages of Man*)と「人間の七つの大罪」(*The Seven Deadly Sins*)を円形劇場で上演するというものであり、ワイルダーの作家としての集大成となるはずのものであったが、彼の生前には「人間の七つの世代」から二作品と「人間の七つの大罪」から四作品が上演されただけで、残念ながら完結しなかった。その「人間の七つの大罪」の未発表で未完の作品である「ドアベルが鳴り響く」(“A Ringing of Doorbells”)と「シェイクスピアと聖書」(“In Shakespeare and the Bible”)において、「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というモチーフが用いられている。

まず、「ドアベルが鳴り響く」は、将軍の未亡人で、娘も亡くしているビーティ夫人(Mrs. Beattie)のところに、キンケイド夫人(Mrs. Kinkaid)と、亡き娘によく似たその娘ダフニ(Daphne)がお金を詐取する目的でやって来るのだが、ビーティ夫人は、将軍に夫が昔お世話になった縁で娘に声楽の勉強をさせる経済的な援助を求める母娘の嘘が明らかになったあとでも、この母娘にお金を渡そうとする作品である。キンケイド母娘は、ビーティ夫人と亡くなった娘が裕福な上流生活を送ってきたことに嫉妬するが、そのいっぽうで、ビーティ夫人も、“Alive and together — that’s the point.” (“A Ringing of Doorbells” 158) という台詞に象徴されるように、生きて一緒にいるキンケイド母娘をうらやましく思っている。それだけではなく、家政婦のマッカラム(Mrs. McCullum)との次のやり取りから、

MRS. BEATTIE (*Her eyes on Mrs. McCullum with a sort of sardonic brooding*):

Think of how full their lives must be! — Full . . . occupied!

MRS. MCCULLUM (*With a start*): What? What’s that you said, Mrs. Beattie?

Occupied! — But what they’re doing is immoral.

MRS. BEATTIE: I’d exchange places with them *like that!* (Doorbells 156, italics and ellipsis by Wilder)

ビーティ夫人は、お金を詐取することが反道徳的なことだとしても、母娘が生き生きと充実した人生を送っているようにみえることを、うらやましく思っていることがわかる。そ

して何よりも、“*proud, stoical, and every inch the ‘General’s Widow’*” (Doorbells 153) とト書きで示される、将軍の未亡人としてのプライドを保ったストイックな人生を送ってきたことに対して、彼女は本当の人生を生きていないと感じている。そういうわけで、だまされていることを承知の上で亡き娘に似ているダフニに金銭的な援助をすることを通して、間接的にはあるが、これまで自分ができなかった人生への積極的な参加をしようとする。その参加の決意は、“Mrs. Beattie! You’re up!” (Doorbells 157) とマッカラムが驚くように車椅子から思わず立ち上がっていたり、“I’m going to receive them without my wheelchair.” (Doorbells 158) と述べて、病人としてではなく母娘に会おうとする行動ではっきりと示されている。

このように、この作品ではビーティ夫人が積極的に人生へ参加する決意をしているのであるが、あくまでもそれはダフニを通しての間接的なものでしかなく、しかも、『ファニー・オトコット』の最後の台詞である“*I shall be young again.*” (“Fanny Otcott” 40) のような、もう一度人生を生きる決意を表明する直接的な台詞もないため、「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というモチーフがほかの作品とくらべると観客にはわかりづらいものとなっている。

次に、「シェイクスピアと聖書」は、モウブレイ夫人 (Mrs. Mowbrey) が、姪のケイティ・バッキンガム (Katy Buckingham) に初めて会うために、そして、その婚約者であり、夫人がかつて売春宿を経営していたときの知り合いであるジョン・ラボック (John Lubbock) を弁護士として雇うために、お互いには知らせずに自宅に招く。しかし、夫人の過去について訊ねるケイティに対して、ジョンは夫人をかばうようなあいまいな返事しかできないため、ケイティは怒って婚約指輪を返して帰ってしまうという作品である。この一幕劇については、「ドアベルが鳴り響く」とは異なり、人生にもう一度参加する決意が台詞のなかではっきりと示されるため、ポール・リフトン (Paul Lifton) による、“Dolly Levi, . . . has not only an antecedent in the ‘three-minute’ plays, Fanny Otcott, but also a reincarnation . . . in Mrs. Mowbrey, the wealthy former madam . . . of *In Shakespeare and the Bible*, . . .” (Lifton 293) というほかの作品とのモチーフの類似に関する指摘がすでになされている。この「シェイクスピアと聖書」では、劇の出だしでメイドのマーゲット (Marget) が述べる、“She’s a widow, poor lady. And very much alone. Would you believe it, if I said that no one’s come to the house to call for the whole time I’ve been here, except her lawyer man. And, oh yes, the minister of her church.” (“*In Shakespeare and the Bible*” 171), “Oh, I’ve been here about a

year. But today we're going to have two callers — you, sir, and a young lady that's coming later.” (In Shakespeare 171) という台詞によって、モウブレイ夫人が女優オトコットやリーヴァイ夫人のようにほぼ外部と遮断され、仲間といえる他人との接触がない生活を送っていることがわかる。そして、モウブレイ夫人の、“Mr. Lubbock, I will tell you what I want. I am a rich woman and I intend to get richer. And I am a lonely woman, and I don't think that that is necessary. *I want to live.* And when you and Katy are married, I want you to help me. *I want company.*” (In Shakespeare 174-75, italics mine) という台詞のなかで、「生きたい」、「仲間が欲しい」というように、はっきりと表現されていることから、「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というモチーフが観客にわかりやすく伝わっているといえる。

3. モチーフの変奏

前節の後半では、「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というモチーフがワイルダーの戯曲においてどのように用いられてきたのかを時系列で振り返ってみた。しかし、このモチーフが使われている六作品のなかで、「軍艦」だけが異なる結末を迎えている。ほかの五作品に関しては、「メッセージとジャンヌ」では間違っただけで配達された指輪に刻まれた言葉を、「ファニー・オトコット」では昔の最初の恋人の訪問を、『結婚仲介人』では聖書に挟まれていた木の葉を、「ドアベルが鳴り響く」では詐欺師の母娘の訪問を、そして、「シェイクスピアと聖書」では姪の結婚をそれぞれきっかけとして、主人公がもう一度人生を生きる決意をする。しかし、「軍艦」では、前節の前半でみたように、主人公のロジャは新しい世界とのつながりを求めて具体的な行動を起こすことによって「人生に十分に参加したいという熱望」は示すのであるが、軍艦の登場というきっかけを目の前にして、

For a moment Captain Roja thought of lighting a bonfire or setting fire to St. Paul's, but he paused. The vision was beautiful, but terrible. He knew that neither himself nor his companions could live in that world; all that power and energy was troubling and remote. He sat down again and watched the marvel pass into the distance, and the other shadowy forms that had gathered on the

slope behind him gazed and trembled and went in silence to their homes.

(“The Warship” 641)

というように、切望していた外の世界とつながることを「ためらい」、それを「恐ろしい」、「厄介で遠い」ものと感じ、軍艦を見送ってしまう。さらに、ほかの島民たちが彼に同調したことを描くことで、彼が軍艦を見送った行為は非難されるべきものではないものとして描かれている。確かに、一般的な物語の流れでは、巨大な文明に恐れをなしてそれに溶け込むことを拒絶してしまうという展開はまったくおかしくないのであるが、「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というモチーフを用いたワイルダーによる一連の作品群の流れのなかでは、軍艦を見送るという結末は異質なものとなっているのである。

それではなぜこの短編小説だけが異なる結末を迎えているのだろうか。筆者はそれをこの作品の執筆時期から考えてみたいのであるが、その執筆時期をこの作品に見受けられる二つの特長から考えてみる。ひとつ目は、作品全体の構成である。これについては本論の第2節で、「最初の二段落と残りの四段落という二部構成のようになっている」と指摘したように、第三段落でジョンやロジャの祖先たちがイングリッドに漂着したころに時間が巻き戻されて、もう一度そこから話が始まっている印象を受ける。そのあたりのことは推測するしかないが、例えば、ワイルダーがサイクル劇「人間の七つの世代」のなかの「青年時代」(“Youth”)において、難破船から生き延びてある島へ上陸するレミュエル・ガリバー(Lemuel Gulliver)と、青年時代が終われば死ななければならないという慣習があるその島の人々との対立を描いていることから、さらに、数年後に亡くなってしまうというフィンランド人船員のエピソードが短編小説全体の流れのなかで果たしている役割ははっきりとしないことから、「軍艦」の前半部分は、ワイルダーはフィンランド人船員と島民たちとの対立か、もしくは、その船員がロジャのような役割を果たすかで話を展開させていくつもりで途中で置いていた作品ではなかったであろうか。そして、前半の漂着した人々の歴史の概略には名前が出てこない、島民たちが住みついているラノン(Lunnon)という集落の名前が後半の最後からふたつ目の段落で何の説明もなくいきなり登場することから、「軍艦」の後半部分は、父ジョンと息子ロジャの対立の物語として途中で書くことを止めていた作品ではなかったであろうか。以前の論文で指摘したように、ワイルダーは『ガリバー旅行記』(*Gulliver's Travels*)の翻案に大きな関心があり、1949年に『ガリバー旅行記』の映画化が企画されていた際に、自分が映画の脚本を制作するのならばオリ

ジナルの脚本を書きたいという理由でその脚本制作は断ったのであるが、彼は俳優ケリー・グラント (Cary Grant) に、映画化をする際の助言の手紙をわざわざ書き送っている (Wilder and Bryer 475)。このようなワイルダーの『ガリバー旅行記』への関心の大きさから考えると、ワイルダーが「難破船からある島へ漂着する」というモチーフで複数の短編小説を書いていたということは十分にあり得る。実際のところ、一幕劇に関しても、「青年時代」の創作計画を記した日誌の七か月前の1960年5月27日付の日誌において、「難破船からの帰還」というモチーフを扱う“Extreme Old Age”というタイトルの一幕劇の構想を書き記しており (Gallup 286-287)、その後創作に取り組んだのではないかと思われる。以上のことから、「軍艦」は、よく似たテーマの異なる二つの物語をくっつけて、そして、全体に手を加えて完成させた作品ではないかと筆者は推察するのである。

ふたつ目の特長は、この作品の文体である。「ザベットの結婚」についての論文のなかで、「ザベットの結婚」には倒置などの文法を用いて文の構造を複雑に見せている文がかなり多く見受けられるという特長を指摘したが、そのなかの四つのパターンとして、①他動詞の目的語を文頭に出している文：“[M]e and many another she spared from that exile of a woman’s soul from Heaven, the marriage of the body.” (“The Marriage of Zabett” 609), ②他動詞とその目的語のあいだに副詞句を割り込ませている文：“She went in, and flinging herself upon the pavement, rehearsed before a great and mystical company the history of her stony heart;...” (Zabett 608), ③副詞節を他動詞の目的語としての名詞節に割り込ませている文：“[S]he remembered how when a man tried to catch hold of her hands, the touch set her a-trembling, and thereafter she lay [sic] shuddering the whole night through.” (Zabett 607), そして、④副詞句が文頭に出ることで倒置が起こる文：“[A]nd in her mind were the delicate hands and black beard of Ketterlingen, her betrothed.” (Zabett 608) を挙げた (井上「ザベットの結婚」6-7)。

この四パターンの文体の特長が、ライブラリー・オブ・アメリカ版の「軍艦」を含むほかの五つの短編小説にみられるかどうかを発表順に調べてみる。まず、1917年6月発表の「ザベットの結婚」の11か月後の1918年5月発表の「強固な幽霊」では、①の例はないが、② “The present biographer does not despair of some day identifying this lady and obtaining from her many facts, letters, and perhaps poems.” (“*Spiritus Valet*” 610), ③ “She has always been glad to tell ... how when he went away, never to be heard from directly in this connection, he left her (...) a sheaf of poems on the

tree and flower life he had found there.” (*Spiritus* 610), ④ “[B]ut only after he had been many moments gone did she realize that in the object of his visit lay the opportunity she waited for.” (*Spiritus* 611) の三つのパターンがみられる。次に、その約二年後の1920年6月発表の「エディ・グレイター」では、③の例はないが、① “Her voice was low and curiously hoarse, and the few phrases she permitted herself: . . .” (“Eddy Greater” 624), ② “I could only . . . deduce lamely from them the shadowy career of a poet.” (Eddy 621), ④ “[H]ere and there under glass lay objects of hand-hammered silver, necklaces meandering among the fields of claret velvet; . . .” (Eddy 621) の三つのパターンがみられる。続いて、1922年から1923年にかけて執筆したとされる「むだな用心」では、① “Reading and writing one never ceases to learn, but education proper lasts six months and is very fatiguing.” (“*Précautious Inutiles*” 631), ② “By classical reading she induced in herself an elevated and imperial temper; . . .” (*Précautious* 632), ③ “The caravan was sixteen miles long and so compact and orderly that when a camel at the head knelt down for a moment to shake a bee out of his ear, the last provision-cart was abruptly halted.” (*Précautious* 633), ④ “Beyond them, to the East, lay a great stretch of curling water, barely poisoning itself on the shelf of creation; . . .” (*Précautious* 631) というすべてのパターンがみられる。その次に、1924年2月発表の「ある日誌：最初で最後の記帳」では、①と③の例はなく、② “He pats with amused indulgence the hillock of my feet.” (“A Diary: First and Last Entry” 636), ④ “There sat the Americans, South Americans and Germans; . . .” (Diary 636) の二つのパターンしかみられない。そして最後に、1936年2月発表の「軍艦」に関してである。③の例はみられないが、① “[T]hese things we cannot know, neither be we like[ly] to know.” (“The Warship” 640), ② “A few years later the population was again diminished by the loss of a dozen of the ablest men who ventured in a rough-hewn boat to visit an island which could be occasionally seen at sunrise on the northern horizon.” (“The Warship” 638), ④ “[T]hese things we cannot know, neither be we like[ly] to know.” (“The Warship” 640) という三つのパターンがみられる。

以上のように、「軍艦」の文体は、1917年から1924年に発表された五篇の短編小説のそれと共通点があるが、そのなかでも特に、筆者は、「①他動詞の目的語を文頭に出している文」を非常に特長的な表現構造であると考え。さらに、この四パターンの文体の特長

について、「軍艦」が発表される以前に発表された四篇の中編小説にもみられるかどうかを発表順に調べてみる。六篇の短編のなかで一番長い作品である「強固な幽霊」が約10頁であることと、作家が文章に凝るのはやはり作品の出だしであるということから、それぞれの小説の出だしの10頁について検討する。まず、「軍艦」のひとつ前の短編小説「ある日誌：最初で最後の記帳」から約二年後に当たる1926年4月出版の『カバラ』(*The Cabala*)では、③の例はみられないが、② “We passed two days . . . in selecting from among the brisk imitations of ancient candelabra those which most successfully simulated age and pure line.” (*The Cabala* 7), ④ “Opposite them sprawled three American Italians returning to their homes in some Apennine village after twenty years of trade in fruit and jewelry on upper Broadway.” (*The Cabala* 2) という二つのパターンと、①の例に類似した、be 動詞の補語としての名詞を文頭に出している文：“Yes, of course. But more than that, too. Fierce intellectual snobs, they are.” (*The Cabala* 4) がみられる。次に、その約一年半後の1927年11月出版の『サン・ルイス・レイ橋』では、① “[T]he other attributes of Heaven you could have for a song.” (*The Bridge of San Luis Rey* 17), ② “[A]nd when an exquisite daughter was born to her she fastened upon her an idolatrous love.” (*Bridge* 14), ③ “[B]ut he thought that when he had enjoyed the style he had extracted all their richness and intention, . . .” (*Bridge* 16), ④ “On that stage were performed endless dialogues with her daughter, impossible reconciliations, scenes eternally recommenced of remorse and forgiveness.” (*Bridge* 14) というすべてのパターンがみられる。

『サン・ルイス・レイ橋』では四パターンすべてがみられ、さらに、非常に特長的な表現構造として注目した「①他動詞の目的語を文頭に出している文」が(『カバラ』では類似の文ではあるが) 両方の作品にみられることから、「軍艦」はもともとは「ザベットの結婚」の1917年から『サン・ルイス・レイ橋』の1927年のあいだに執筆されたのではないかと推察する。なぜならば、『サン・ルイス・レイ橋』の二年三カ月後の1930年2月出版の『アンドロスの女』(*The Woman of Andros*)では、特長的な①の例、そして、④の例はみられず、② “The great cliff that was one day to be called Gibraltar held for a long time a gleam of red and orange, . . .” (*The Woman of Andros* 137), ③ “[A]nd she says that I’m to tell you this, that unless Pamphilus stops those visits all idea of a marriage between himself and Philumena is impossible.” (*Woman* 142) という二つのパターンしかみられない。さらに、その約五年後、「軍艦」の発表の約一年前に当たる

1935年1月出版の『めざすは天国』(*Heaven's My Destination*)では、①の例がみられないだけでなく、②“Then without sitting down he printed across the top the words, ‘Thou, Lord, seest me.’”(Heaven's My Destination 5)のパターンしかみられない。つまり、『サン・ルイス・レイ橋』以後の小説においては文体の変化が起きているように見受けられるからである。

以上のように、「軍艦」は、作品全体が二部構成にみえることから、古い時期に創作したよく似たテーマの二つの異なる物語が存在し、そして、1936年の発表を前にその二つを併せ、全体に手を加えて完成させた作品ではないか、そして、1917年から1924年に発表された短編小説に文体が似ていること、さらに、1927年発表までの中編小説とは文体が似ているが、1930年以後の中編小説のそれとは似ていないことを考え合わせると、その「古い時期」とは1917年から1927年までのあいだではないかと推察されるのである。

そして、「軍艦」(の元の物語)は1917年から1927年までのあいだに、すなわち、ほかの短編小説とほぼ同じ時期に執筆されていたと考えれば、「ある日誌：最初で最後の記帳」から「軍艦」までに短編小説に関して12年のブランクがあり、さらに、「軍艦」以後には短編小説が一切発表されなかったという謎が解明するのではないか。すなわち、12年のブランクは最大3年のブランクに修正され、短編小説は1936年以後は発表されなかったのではなく、1927年以後は事実上執筆されなかったということになる。つまり、ワイルダーが、1926年に『カバラ』で小説家としてデビューをし、1927年に『サン・ルイス・レイ橋』を発表するまでのある時点で、もう短編小説は書かないという判断を、言い換えると、小説というジャンルでは中・長編小説で自分の主題や思想を表現することが十分にできるという確信を得たのではないかという推察ができるのである。実際のところ、『サン・ルイス・レイ橋』以後は、1930年の小説『アンドロスの女』、1931年の一幕劇集『長いクリスマス・ディナー』(*The Long Christmas Dinner and Other Plays in One Act*)、1932年初演のフランスの劇作家アンドレ・オベア(André Obey, 1892-1975)の『リュクレースの凌辱』(*Le Viol de Lucrece*, 1931)の翻案劇『リュクレース』(*Lucrece*)、1935年の小説『めざすは天国』というように、中・長編小説と戯曲の創作が続いた。

「軍艦」(の元の物語)は1917年から1927年までのあいだに執筆されていた、すなわち、「軍艦」は1936年のジャーナルのために新たに書き下ろされたものではなく、すでにあったものに少し手を加えたものであると考えることは、本論の「はじめに」の節でみた、「軍艦」が発表された前年にあたる1935年の後半にワイルダーが「小説を捨てて戯曲のみを書くことを宣言した」こととも矛盾しなくなる。つまり、創作意欲が戯曲に向かっていた時

期に、長いブランクを経て（結果的に最後となる）短編小説が発表されたことの説明がつくのではないだろうか。さらに、「軍艦」が発表されたのが『イェール・リテラリー・マガジン』の百周年記念号であったことも重要な事実である。すなわち、1927年に『サン・ルイス・レイ橋』でピューリッツァー賞を受けたワイルダーには、多くの人は戯曲ではなく小説を投稿することをやはり期待したのではないだろうか。そして、ワイルダーも心が向かっていた戯曲ではなく短編小説を投稿することでその期待に応えようとしたのではないだろうか。このように考えれば、この時期に短編小説が発表され（そして、最後の短編小説となっ）た謎がさらに謎ではなくなるのではないだろうか。

それでは、考察してきたことから、「軍艦」（の元の物語）の執筆時期は1917年から1927年までのあいだであり、1936年の発表を前に二つの物語を併せて全体に手を加えて完成させたと想定し、この節の最後に、「人生にもっと十分にもっと自由に参加したいという人間の熱望」というモチーフを共通とするワイルダーの作品のなかで、「軍艦」だけが異なる結末を迎えている理由を考察する。ほかの五作品では主人公がある出来事をきっかけにもう一度人生を生きる決意をするのに対して、「軍艦」では、外の世界とのつながりを切望していた主人公は、軍艦の接近という大きなきっかけにもかかわらず、巨大な軍艦を目の当たりにして、その軍艦に象徴される世界とのつながりを「ためらい」、その世界を「恐ろしい」、「厄介で遠い」ものと感じ、軍艦を見送ってしまう。

このように、「軍艦」だけが異なる結末を迎えていることには、「軍艦」というタイトルが当然のように戦争をイメージさせるように、執筆された時期のアメリカを取り巻く世界情勢と密接な関係があるのではないと思われる。「軍艦」（の元の物語）は1917年から1927年までのあいだに執筆されていたと推察するのであるが、この元の物語の「難破船からある島へ漂着する」というモチーフは、先ほど指摘した『ガリバー旅行記』の影響を受けていることはもちろんであるが、例えば、その犠牲者のなかに128名のアメリカ人が含まれていた1915年5月7日にイギリスの客船ルシタニア号がドイツ潜水艦に撃沈された事件、そして、中立国の商船に対しても攻撃をおこなう宣言をした1917年2月のドイツによる無制限潜水艦作戦（この宣言に対して4月にアメリカはドイツに宣戦布告し、参戦することになった）という第一次世界大戦に関連した事件にも影響を受けたのではないだろうか。第一次世界大戦は、長らく孤立主義（Isolationism）の立場を取っていたアメリカが、建国以来初めて大規模に海外へ派兵をおこなった戦争で、200万人もの兵がヨーロッパ戦線へと向かったわけであり、アメリカ国民ならば誰もがその影響を精神的に大きく受けたと思われる。筆者は、「軍艦」において島への軍艦の出現という物語の最後の場面が書き

足されたのは、『イェール・リテラリー・マガジン』への投稿の直前ではないかと推察するのであるが、1917年から1927年までの時点ですでに軍艦というイメージが作品に取り入れられていたとすれば、それは第一次世界大戦というものが影響を与えていたにちがいないと思われる。

そして、第一次世界大戦後、アメリカは長期にわたる好景気を享受し、1920年代の国民総生産は1.6倍に増えた。しかし、1929年10月のウォール街（Wall Street）の証券取引所での株価の大暴落を発端に、1930年代のアメリカは労働者の四分の一が失業するという大恐慌（Great Depression）の時代に入った。ニューディール政策（New Deal）によっても景気は上向かず、アメリカ国民は陰鬱な時代を過ごしていたが、さらに、ヨーロッパ各地で頻発していた紛争による新たな大戦の予感が、国民のさらなる不安感を煽っていたであろう。「軍艦」における軍艦の出現という場面がジャーナルへの投稿の直前に書き足されたのではないかと考えるのは、このような時期を過ごすアメリカ人ワイルダーの気持ち、迫りくる戦争を象徴する軍艦として表現されたのではないかと考えるからである。第二次世界大戦を契機にアメリカの景気は回復するわけであるが、それは多くの人間の犠牲の上に成り立ったものであり、「軍艦」において主人公が外の世界とつながる大きな機会を見送ってしまうという行動には、その巨大な軍艦が象徴する、人々を次々と呑みこんでいく戦争というものへの恐れと、そのような戦争から人間の尊厳を守ろうとするささやかな抵抗が表現されているのではないかと推察するからなのである。

4. お わ り に

以上のように、本論では、ワイルダーの最後の短編小説「軍艦」について論考を進めてきた。まず、この小説で使用されているモチーフが、ワイルダーの作家としての初期から後期まで戯曲において繰り返し用いられてきていることを例証することを通して、この短編小説がほかのワイルダーの作品と関連している重要な作品であることを明らかにした。そして、次に、この小説ではそのモチーフが少し形を変えて用いられている、すなわち、ほかの作品では主人公がもう一度人生を生きる決意をするのに対して、この作品においてのみ主人公がその決意をしない暗い結末を迎えていることを指摘した。そして、そのようなモチーフの「変奏」は、この小説が仕上げられたときのアメリカを取り巻く世界情勢、すなわち、陰鬱な大恐慌と迫りくる戦争という不安感によって起こったのではないかと推察した。

この短編小説「軍艦」は、「人生にもっともっと自由に参加したいという人間の熱望」をモチーフとして使用していることから、ワイルダーのほかの作品につながる重要な作品であることは明らかであるが、現在のところは残念なことに、ほかの短編小説とともに、研究者からの批評の対象にはなっていない。しかし、ライブラリー・オブ・アメリカ版の出版によって、ワイルダーの短編小説群が読まれる機会が生まれたわけなので、今後「軍艦」を含めた彼の短編小説群が多く、深く論じられることを期待したい。

引 証 文 献

- [1] Blank, Martin, Dalma Hunyadi Brunauer, and David Garrett Izzo, eds. *Thornton Wilder: New Essays*. West Cornwall, CT: Locust Hill Press, 1999.
- [2] Bryer, Jackson R., and Lincoln Konkle, eds. *Thornton Wilder: New Perspectives*. Evanston, Illinois: Northwestern UP, 2013.
- [3] Gallup, Donald., ed. *The Journals of Thornton Wilder, 1939-1961*. New Haven: Yale UP, 1985.
- [4] Gallup, Donald, and A. Tappan Wilder, eds. *The Collected Short Plays of Thornton Wilder*. Vol. I. New York: Theatre Communications Group, 1997.
- [5] Goldstone, Richard H. *Thornton Wilder: An Intimate Portrait*. New York: E. P. Dutton, 1975.
- [6] Haberman, Donald. *The Plays of Thornton Wilder: A Critical Study*. Middletown, Connecticut: Wesleyan UP, 1967.
- [7] Hamalian, Leo, and Edmond L. Volpe, eds. *Pulitzer Prize Reader*. New York: Popular Library, 1961.
- [8] Harrison, Gilbert A. *The Enthusiast: A Life of Thornton Wilder*. New Haven: Ticknor & Fields, 1983.
- [9] Lifton, Paul. “Theatrical Ragout from a Master Chef.” Blank, Brunauer and Izzo 283-295.
- [10] McClatchy, J. D. “Part of the Alphabet: Wilder as Novelist.” Bryer and Konkle 13-21.
- [11] McClatchy, J. D., ed. *Thornton Wilder: The Bridge of San Luis Rey and Other Novels 1926-1948*. New York: The Library of America, 2009.
- [12] Niven, Penelope. *Thornton Wilder: A Life*. New York: HarperCollins, 2012.
- [13] Simon, Linda. *Thornton Wilder: His World*. New York: Doubleday, 1979.
- [14] Wilder, Robin G., and Jackson R. Bryer, eds. *The Selected Letters of Thornton Wilder*. New York: Harper Perennial, 2009.
- [15] Wilder, Thornton. *The Angel That Troubled the Waters and Other Plays*. New York: Coward-McCann, 1928.
- [16] ——. *The Bridge of San Luis Rey*. 1927. New York: Harper Perennial, 1998.
- [17] ——. *The Cabala*. 1926. *The Cabala and The Woman of Andros* 1-134.
- [18] ——. *The Cabala and The Woman of Andros*. New York: Harper Perennial, 2006.
- [19] ——. “A Diary: First and Last Entry.” McClatchy 635-37.
- [20] ——. “Eddy Greater.” McClatchy 621-30.
- [21] ——. “Fanny Otcott.” *The Angel That Troubled the Waters and Other Plays*. 33-

- 40.
- [22] —. “The Happy Journey to Trenton and Camden.” Gallup and Wilder 84–102.
- [23] —. *Heaven’s My Destination*. 1935. New York: Harper Perennial, 2003.
- [24] —. “In Shakespeare and the Bible.” Gallup and Wilder 170–92.
- [25] —. “The Marriage of Zabett.” McClatchy 607–09, and Goldstone 23–25.
- [26] —. *The Matchmaker. Three Plays*. 251–401.
- [27] —. “The Message and Jehanne.” *The Angel That Troubled the Waters and Other Plays*. 67–71.
- [28] —. “*Précautions Inutiles*.” McClatchy 631–34.
- [29] —. Preface. *Three Plays*. vii–xiv.
- [30] —. “A Ringing of Doorbells.” Gallup and Wilder 153–69.
- [31] —. “*Spiritus Valet*.” McClatchy 610–20.
- [32] —. *Three Plays: Our Town, The Skin of Our Teeth, The Matchmaker*. New York: Harper & Row, 1957.
- [33] —. “The Warship.” McClatchy 638–41, and Hamalian and Volpe 106–09.
- [34] —. *The Woman of Andros*. 1930. *The Cabala and The Woman of Andros* 135–203.
- [35] —. “Youth.” Gallup and Wilder 270–294.
- [36] 井上治. 「ソートン・ワイルダーの『池を波立たせた天使』論 — 劇作家としての出発点」『近畿大学英語研究会紀要』第3号（近畿大学英語研究会，2009）：125–42.
- [37] —. 「ソートン・ワイルダーのサイクル劇『人間の七つの大罪』の4作品について — なぜ出版しなかったのか，なぜ完成させなかったのか」『生駒経済論叢』第12巻第1号（近畿大学経済学会，2014）：1–19.
- [38] —. 「ソートン・ワイルダーのサイクル劇『人間の七つの世代』の2つの劇 — 未完に終わった理由を探る」『生駒経済論叢』第12巻第2号（近畿大学経済学会，2014）：1–17.
- [39] —. 「ソートン・ワイルダーの短編小説『ザベットの結婚』 — 繰り返されるモチーフ『聖人』」『生駒経済論叢』第13巻第2号（近畿大学経済学会，2015）：1–15.